

菌類とは、一般にかび、きのこ、酵母などと呼ばれている生物群の総称である。肉眼では見ることのできない微細なものが多く、採集や種を特定することは容易でない。このため、これまでに確認された菌類はおよそ10万種とされているが、これらは現存する菌類の数%に過ぎないと推定され、未知種があまりにも多い。私たちの目につきやすい菌類は、担子菌門や一部の子のう菌門のうち肉眼で観察できる大きさの生殖器官、すなわち子実体を形成するきのこ類である。きのこ類の本体は菌糸であるが、菌糸が直接観察されることは少なく、通常は子実体の観察によって同定され、生息実態が推測される。これは、調査手法としては間接的であり、サンプリングは断片的である。このような調査条件下でより正確な生息実態を知るためには、長期に及び観察記録の蓄積が重要である。

近年では分子生物学的な手法による同定が行われるようになり、子実体観察に頼っていた同定に客観的な裏付けが与えられるようになった。これらの結果が整理され、少しずつではあるがきのこ類の分布に関する情報が集積されている。このため、菌類における絶滅危惧種の選定は、前刊の「改訂しまねレッドデータブック2013植物編」と同じく、対象をきのこ類に限定した。

きのこ類を養分の摂り方の違いで区分すると、一つのグループは種々の樹木と共生して、養分の受け渡しをしている菌根性きのこである。もう一つのグループは、森林内の倒木や落葉などの有機物を分解して養分とする腐生性きのこで、各樹種へ特異的に生息する種類もみられる。島根県では、コナラにアカマツが混交する雑木林（二次林）、中国山地の標高約700m以上に分布するブナ林とミズナラ林、低地に分布するシイ・カシを主体とした照葉樹林、海岸沿いの防風クロマツ林など、さまざまな森林が成林しており、森林の種類ごとにきのこ類の分布を確かめる必要がある。

絶滅危惧種の選定は各種の分布調査に基づいて行われるべきであるが、当初の「しまねレッドデータブック2004」では2000年に環境庁が選定した絶滅危惧種のうち、本県において分布が確認された種を中心に7種を選定した。これらはいずれもブナ林に生息し、温暖化によってブナ林が減少すれば生息が危ぶまれると考えられた。このうち、絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）としたクチキトサカタケ、ムカシオオミダレタケ、ツヤナシマンネンタケ、エビタケ、タマチョレイタケは県内での分布密度がきわめて低い種であり、本改定版においても同じカテゴリーとした。前刊(2013)まで絶滅危惧Ⅱ類（VU）としていたウスキブナノミタケとツキヨタケは、その後の調査でブナ林内に優先的に生息していることが確かめられ、本改定版では準絶滅危惧（NT）へ移動させた。

マツ林では、燃料革命後に落葉や落枝が焚きつけとして利用されなくなり、これにともなう土壌の富栄養化や草地化はきのこ類の分布に影響を及ぼし、一部の種は生息域の矮小化が心配されるようになった。また、松くい虫被害によるマツ林の減少は、本県の森林環境を激変させた。貧栄養土壌のマツ林に生息していたマツタケは環境変化の影響を大きく受け、1975年には県内30市町村（合併前）でみられた発生が、1990年には6町（合併前）に減少し、現在ではマツタケ産地と呼べる地域は皆無となった。

前刊(2013)では、これ以上にマツ林土壌が成熟し、またマツ林減少が進むことによって絶滅が危惧されるホンショウロ、

ショウロおよびヌメリアイタケの3種を準絶滅危惧（NT）に選定した。さらに、本改定版ではこのカテゴリーへ、同じくマツ林に分布するシモコシ、マツバハリタケを追加した。なお、ヌメリアイタケは2004年に確認して以来、その後は子実体が観察されないため、本改定版では情報不足（DD）へ移動させた。

2023年には、島根県内で亜熱帯性の発光菌であるヤコウタケに類似するきのこが採集された。温暖化によるヤコウタケの生息域拡大も視野に入れて調査された結果、採集されたきのこは形態的に既知種との相違点があり、分子生物学的な情報を併せた判断により、ヤコウタケとは別種とされた。本種は青森県と鳥取県でも確認され、それぞれの採集地に共通した環境は湿度が保たれる広葉樹林であること、積雪がみられることであった。このため、日本菌学会大会において、和名にユキグニヤコウタケ（仮称）が提案された。本種の分布は矮小で、点在していることから、生息地にはいくつかの生育条件が適切に備わっていると考えられる。本県の豊かな自然を維持するための指標生物として、本改定版では本種を準絶滅危惧（NT）に選定した。

（富川康之）

参考文献

- 宮崎恵子・工藤伸一・牛島秀爾・土屋 慧・小野寺杏仁・白石泰志・富川康之・長澤栄史（2024）日本の冷涼な地域で発見されたヤコウタケ様の発光菌について。日本菌学会第68回大会講演要旨集：63。
- 宮崎恵子・富川康之（2025）島根県で採集されたきのこ（Ⅸ）—2021～2024年の新規同定種—。島根県中山間地域研究センター研究報告，21：35-42。
- 富川康之（2006）子実体懸濁液散布によるクロマツ苗畑でのショウロ栽培。島根県中山間地域研究センター研究報告，2：43-49。

菌類掲載種一覧

計13種

絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

- フチキトサカタケ
- ムカシオオミダレタケ
- ツヤナシマンネンタケ
- エビタケ
- タマチョレイタケ

計5種

準絶滅危惧 (NT)

- ↓ ウスキブナノミタケ
- ユキグニヤコウタケ (仮称)
- ↓ ツキヨタケ
- シモコシ
- ホンショウロ
- ショウロ
- マツバハリタケ

計7種

情報不足 (DD)

- ◆ ヌメリアイタケ

計1種

【記号説明】

- : カテゴリー区分変更なしの種 (7種)
- ↑ : 上位のカテゴリー区分への変更種 (0種)
- ↓ : 下位のカテゴリー区分への変更種 (2種)
- : 新規掲載種 (3種)
- ◇ : 情報不足からの変更種 (0種)
- ◆ : 情報不足への変更種 (1種)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

ピョウタケ目ピョウタケ科

クチキトサカタケ

Ascoclavulina sakaii

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):宮崎恵子



選定理由

日本固有種であり、分布はまれである。県内では西部地域のブナ林のみで分布が確認されている。ブナ林の減少とともに、県内での絶滅が危惧される。

概要

子実体は塊状に発生し、のちにこん棒状あるいは先端が扁平なこん棒状の突起を放射状に形成する。こん棒状突起は直径0.5-1cm、長さ通常1-3cm。全体の大きさは直径2.5-10cm、高さ2.5-7cm。表面は灰黄色から明るい灰緑色、のち淡オリーブ褐色からオリーブ褐色。子のはこん棒状から円筒形、無弁子なので、頂孔はヨード反応陰性、8個の孢子を有し、65-100×4.5-7μm。孢子は楕円形、無色あるいはわずかに緑色をおび、6-7×2.5-4μm、2-3個の油球がある。

本州、四国、九州のブナ林に分布し、夏季から秋季にブナの倒木や立ち枯れた樹幹の地際付近に発生する。

参考文献

今関六也・本郷次雄(1989)原色日本新菌類図鑑(Ⅱ)、315pp. 保育社、大阪。
今関六也・大谷吉雄・本郷次雄(2011)増補改訂新版 日本きのこ、山と溪谷社、東京。

県内での生育地域・生育環境

県西部のブナ林において、2002年に最初の分布が確認された。子実体は倒木や立ち枯れたブナの比較的乾燥しにくい部位に発生する。

存続を脅かす原因

生息域の狭小化、基質であるブナ倒木の減少、生育場所の乾燥化。(執筆: 富川 康之)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

キクラゲ目キクラゲ科

ムカシオオミダレタケ

Protodaedalea foliacea

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):宮崎恵子



選定理由

国内における分布はまれである。県内では西部地域のブナ林のみで分布が確認されている。ブナ林の減少とともに、県内での絶滅が危惧される。

概要

子実体は平たい丸山形からやや馬蹄形、無柄で、傘の側面が基質に付着し、半円形となる。幅は3-15cm、基部の厚さ1-5cm。乳白色から淡黄褐色または淡桃褐色。肉質はやや多湿で寒天質を含み、もろく、乾燥するといちじるしく収縮して原形を失う。傘上面は長さ1-5mmの羽毛状に分枝した毛に覆われ、下面は放射状から迷路状のひだとなる。孢子は倒卵形、無色、平滑、10-12×4-7μm、薄壁、非アミロイド。子実体は真正担子菌綱タマシヨレイタケ目に類似するが、隔壁をもつ担子器を形成するため、異型担子菌綱キクラゲ目に所属する。

国内では北海道、本州、四国、九州のブナ林に分布し、夏季から秋季に発生する。

参考文献

CABI Bioscience (2025) Index Fungorum. <http://www.indexfungorum.org>. (2025年9月16日閲覧)
今関六也・本郷次雄(1989)原色日本新菌類図鑑(Ⅱ)、315pp. 保育社、大阪。
早乙女 梢(2021)多孔菌類の種多様性の解明と分類学的位置に関する研究、日本きのこ学会誌、29(1): 15-21。

県内での生育地域・生育環境

県西部のブナ林において、2002年に最初の分布が確認された。生育地は腐朽の進んだブナなど広葉樹の倒木が多くある地域で、子実体は倒木の比較的乾燥しにくい部位に発生する。

存続を脅かす原因

生息域の狭小化、基質であるブナなど広葉樹の倒木が減少、生育場所の乾燥化。

(執筆: 富川 康之)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

タバコウロコタケ目タバコウロコタケ科

ツヤナシマンネンタケ

Pyrrhoderma sendaiense

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者): 島根県自然環境課



選定理由

国内における分布は比較的まれである。県内では東部および西部地域のブナ林で分布が確認されている。本種はおもにブナの腐朽材上に生育するため、ブナ林の減少とともに、県内での絶滅が危惧される。

概要

子実体は傘と柄からなる。傘は腎臓形、扁平から貝殻状に湾曲し、幅3—10cm、厚さ3—10mm。傘上面は殻皮で被われ、灰褐色から肉桂色、にぶい光沢があり、浅い環溝と放射状のしわがみられる。肉は黄褐色、厚さ3—8mm。傘下面は管孔状、灰褐色。孔口は円形、微細で7—8個/mm。柄は通常傘の片側につき、長さ5—10cm、幅0.5—1.5cm。柄表面は傘表面と同色で、厚く堅い殻皮で被われ、中実。胞子は類球形、無色、平滑、5—6.5×5μm、薄壁、非アミロイド。

国内では本州、四国、九州のブナ林に分布し、ブナなど広葉樹の倒木や切り株に発生する。

参考文献

今関六也・本郷次雄(1989) 原色日本新菌類図鑑(Ⅱ)、315pp. 保育社、大阪。
今関六也・大谷吉雄・本郷次雄(2011) 増補改訂新版 日本のきのこ、山と溪谷社、東京。

県内での生育地域・生育環境

県東部および西部のブナ林において、2002年に最初の分布が確認された。生育地は比較的乾燥しにくい場所であり、腐朽の進んだブナなどの倒木に認められる。

存続を脅かす原因

生息域の狭小化、基質であるブナなど広葉樹の倒木が減少、生育場所の乾燥化。

(執筆: 富川 康之)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

タマショレイタケ目タマショレイタケ科

エビタケ

Ganoderma tsunodae

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者): 島根県自然環境課



選定理由

国内における分布は比較的まれである。県内では東部および西部地域のブナ林で分布が確認されている。本種はおもにブナの腐朽材上に生育するため、ブナ林の減少とともに、県内での絶滅が危惧される。

概要

子実体は半円形、へら形または扇形、無柄で、基部が細まり、傘の側面が基質に付着する。傘の幅5—20cm、基部の厚さ1—4cm。傘上面は不規則な粒状の突起をおびて粗荒、灰白色から栗褐色。肉は類白色、肉質は繊維質で放射状に裂くことができるが、乾くといちじるしく堅くなる。傘下面は管孔状で、白色から褐色。孔口は円形、微細で4—5個/mm。胞子は広卵形、淡黄色、20—24×14—16.5μm、二重構造のマンネンタケ型で、非アミロイド。

国内では本州、四国、九州のブナ林に分布し、比較的まれな種で、ブナなどの広葉樹の倒木、切り株、立ち枯れた幹の地際近くに発生する。

参考文献

今関六也・本郷次雄(1989) 原色日本新菌類図鑑(Ⅱ)、315pp. 保育社、大阪。
今関六也・大谷吉雄・本郷次雄(2011) 増補改訂新版 日本のきのこ、山と溪谷社、東京。

県内での生育地域・生育環境

県東部および西部のブナ林において、2002年に最初の分布が確認された。生育地は倒木および立ち枯れたブナが比較的多い森林で、子実体はとくに立ち枯れたブナ樹幹の基部に発生しやすい。

存続を脅かす原因

ブナ林の減少による生息域の狭小化。

(執筆: 富川 康之)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

タマチョレイタケ目タマチョレイタケ科

タマチョレイタケ

Polyporus tuberaster

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):宮崎恵子



選定理由

国内における分布は比較的まれである。県内では東部と中部地域の広葉樹林で分布が確認されている。本種はおもにブナなど広葉樹の林地に生育するため、ブナ林の減少とともに、県内での絶滅が危惧される。

概要

子実体は傘と柄からなる。傘はほぼ円形、扁平で中央部がややくぼみ、漏斗状になる。傘は幅4-12cm、厚さ0.5-1cm。傘上面は淡黄褐色で、平たく密着した黄褐色の鱗片で覆われる。肉は白色、厚さ3-8mm。傘下面は管孔状、白色。孔口は初め円形、生長にともないやや角張り、放射状に長くなる。柄はほぼ中心生、長さ5-8cm、幅0.5-1cm。柄の表面は黄白色から汚黄色、中実。しばしば地中に長径5-20cmの球塊状の偽菌核をつくり、子実体はこの菌核から発生するが、菌核を形成せずに朽木から発生する場合もある。材の白色腐朽をおこす。胞子は長楕円形、無色、平滑、10-15×4-5.5μm、薄壁、非アミロイド。

国内では本州、四国、九州に分布し、ブナ林などの地上や広葉樹の倒木に発生する。

参考文献

今関六也・本郷次雄(1989) 原色日本新菌類図鑑(Ⅱ), 315pp. 保育社, 大阪.
今関六也・大谷吉雄・本郷次雄(2011) 増補改訂新版 日本のきのこ, 山と溪谷社, 東京.

県内での生育地域・生育環境

県中部の三瓶山山麓のブナ林において、2002年にシデ枯枝上で最初の子実体が確認された。2021年には同じく三瓶山においてブナ林以外でも分布が確認された。また、2012年には県東部飯南町の広葉樹林でも確認されている。

存続を脅かす原因

生息域の狭小化、基質であるブナなど広葉樹の倒木が減少、生育場所の乾燥化。

(執筆: 富川 康之)

準絶滅危惧 (NT)

ハラタケ目クヌギタケ科

ウスキブナノミタケ

Mycena sp.

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):宮崎恵子



選定理由

国内に広く分布が認められているが、ブナ堅果から特異的に発生するため、県内では高標高地域に点在するブナ林でのみ確認されている。ブナ林の減少とともに、県内での絶滅が危惧される。

概要

子実体は傘と柄からなる。傘は初め卵形、のちに円錐形からほぼ平らに開き、直径5-7mm。傘上面は平滑、黄色から淡黄色、のち淡黄土色から類白色となり、湿時に条線をあらわす。ひだは直生からやや垂生、淡黄土色、やや疎。柄は細長く、長さ5-7cm、幅1mm、黄色から淡黄色、中空。柄の基部は黄白色で根状に伸び、淡黄色の軟毛をつける。胞子は卵形から楕円形、8.5-12×4.5-5.5μm、初めやや粗面でアミロイドであるが、成熟すると平滑で非アミロイドになる。

参考文献

今関六也・本郷次雄(1987) 原色日本新菌類図鑑(Ⅰ), 325pp. 保育社, 大阪.
今関六也・大谷吉雄・本郷次雄(2011) 増補改訂新版 日本のきのこ, 山と溪谷社, 東京.

県内での生育地域・生育環境

2002年に県西部、2003年に県東部の一部地域で確認され、県内での分布は矮小と考えられたが、現在はブナ樹下に優先的に生息していることが知られている。子実体は前年以前のブナ堅果から発生し、この堅果には落葉や腐植が堆積していることが多く、比較的乾燥しにくいことが生育条件と考えられる。

存続を脅かす原因

生育域の狭小化、基質であるブナの減少、生育場所の乾燥化。

(執筆: 富川 康之)

菌類

絶滅野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

準絶滅危惧 (NT)

ハラタケ目クヌギタケ科

ユキグニヤコウタケ (仮称)

Mycena sp.

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

-

撮影者(提供者):宮崎恵子



選定理由

国内では本県のほか、青森県、鳥取県で分布が認められており、県内では隠岐の島町の限られた地域で確認されている。本種の生息に適した環境が変化することで、県内での絶滅が危惧される。

概要

子実体は傘と柄からなり、暗下で全体が緑色に発光する。傘は初め扁球状、のちに平たい饅頭形となり、中央はややへそ状にくぼむ。直径7-18mm。傘上面は初め淡黄白色で中央は暗褐色、のち淡黄褐色から淡灰褐色となり、湿時に条線をあらわし、ゼラチン化して粘性をおびる。ひだは離生し、小ひだがある。柄は長さ10-20mm、太さ1-2mm、白色で表面は微粉状、基部は吸盤状となる。胞子は楕円形から広楕円形、平滑、5.5-8×4-6μm、アミロイド。

亜熱帯性の発光菌であるヤコウタケとは、形態や分子生物学的特徴の違いから別種と考えられる。

参考文献

宮崎恵子・工藤伸一・牛島秀爾・土屋 慧・小野寺杏仁・白石泰志・富川康之・長澤栄史 (2024) 日本の冷涼な地域で発見されたヤコウタケ様の発光菌について。日本菌学会第68回大会講演要旨集: 63.

宮崎恵子・富川康之 (2025) 島根県で採集されたきのこ (IX) -2021~2024年の新規同定種-。島根県中山間地域研究センター研究報告, 21: 35-42.

県内での生育地域・生育環境

2023年に隠岐の島町の一部地域で確認され、分布は同町内に限られている。子実体は初夏と初秋、沢浴いなど湿度が保たれる森林において、広葉樹の腐朽材上に群生し、比較的乾燥しにくいことが生育条件と考えられる。

存続を脅かす原因

生育環境の変化、基質である広葉樹の減少、生育場所の乾燥化。

(執筆者: 富川 康之)

準絶滅危惧 (NT)

ハラタケ目ツキヨタケ科

ツキヨタケ

Omphalotus japonicus

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

-

撮影者(提供者):宮崎恵子



選定理由

国内に広く分布が認められているが、おもにブナの腐朽材上に生育するため、県内では高標高地域に点在するブナ林での発生が多い。ブナ林の減少とともに、県内での絶滅が危惧される。

概要

子実体は傘と柄からなる。傘は半円形から腎臓形、幅10-25cm。傘上面は黄橙褐色でやや濃色の小鱗片で覆われている。ひだは垂生し、淡黄色のち白色となり、幅が広くて2cmにおよぶこともある。ひだは暗下で緑色に発光する。柄は太くて短く、長さ1-3cm、幅1-3cm、傘の側方につき、環状の隆起帯がある。柄の内部には暗紫色から黒褐色のしみがみられ、この点でシイタケ、ヒラタケ、ムキタケなどの類似種と区別できる。胞子は球形、平滑、11.5-15μm、非アミロイド。

国内でもっとも中毒例の多い毒きのこで、胃腸系の症状として嘔吐、腹痛、下痢が多く、重篤症状は痙攣、ショックなどを起こす。

参考文献

今関六也・本郷次雄 (1987) 原色日本新菌類図鑑 (1), 325pp. 保育社, 大阪.

今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (2011) 増補改訂新版 日本のきのこ. 山と溪谷社, 東京.

県内での生育地域・生育環境

初秋から秋の中頃にかけて、おもにブナの倒木や立ち枯木にたくさんの子実体が重なり合って発生する。まれにコナラ、イタヤカエデなどにも発生し、シイタケほど木からの発生も確認されている。

存続を脅かす原因

生息域の狭小化、基質であるブナの減少。

(執筆者: 富川 康之)

準絶滅危惧 (NT)

ハラタケ目キシメジ科

シモコシ

Tricholoma auratum

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):宮崎恵子

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

情報不足 (DD)



選定理由

国内に広く分布が認められており、2針葉のマツ属と共生するとされ、県内ではおもに海岸砂丘地に造成された防風クロマツ林に分布する。クロマツ林の減少による分布域の狭小化のため、県内での絶滅が危惧される。

概要

子実体は傘と柄からなる。傘は初め饅頭形、のち中高の平らに開き、直径5-10cm。傘上面は淡黄色で、中央部にしばしば小鱗片を生じ、湿時に粘性がある。ひだは湾生または離生、帯緑黄色、密。柄は長さ4-7cm、太さ7-15mm、表面は繊維状で淡黄色。胞子は広楕円形、6.5-8×4.5-5μm、非アミロイド。

子実体全体が鮮やかな黄色のため見つけやすく、風味と歯ごたえに優れた食用きのことしてきたが、海外の近縁種で中毒事例があり、近年では本種を毒きのことして表示する図鑑もある。子実体の形態がよく似たキシメジは、苦みがある点で区別される。

参考文献

今関六也・本郷次雄(1987) 原色日本新菌類図鑑(Ⅰ)、325pp. 保育社、大阪。

今関六也・大谷吉雄・本郷次雄(2011) 増補改訂新版 日本のきのこ、山と溪谷社、東京。

環境省自然環境局生物多様性センター(2025) いきものログ/レッドリスト・レッドデータブック。https://ikilog.biodic.go.jp/Rdb/booklist、(2025年9月16日閲覧)

県内での生育地域・生育環境

県内では東部地域の海岸クロマツ林において分布が確認されている。子実体は晩秋から初冬にかけて、落葉や腐植を持ち上げるようにして発生し、散生または群生する。

存続を脅かす原因

生息域の狭小化、共生関係にあるクロマツ(林)の衰退。

(執筆者: 富川 康之)

準絶滅危惧 (NT)

イグチ目ショウロ科

ホンショウロ

Rhizopogon luteolus

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

情報不足 (DD)

No Image

選定理由

国内では本州以南で認められており、分布はまれで、各分布域は狭小である。クロマツと共生するため、県内ではおもに海岸砂丘地に造成された防風クロマツ林に分布する。クロマツ林の減少による分布域の狭小化、さらに本種の生息に不適な林地土壌の富栄養化が進み、県内での絶滅が危惧される。

概要

子実体は地中あるいは半地中に生じ、球形から類球形で、直径1-3cm。表面は幼菌時の白色から徐々に褐色に変わる。傷付けても淡赤紫色に変色しないが、水酸化カリウム水溶液を付けると赤紫色に変色することがショウロとの明らかな相違点である。しばしば、子実体表面にまとい付く菌糸束がみられる。内部は淡黄色のち褐色で、不快臭がある。胞子は7-12×3.5-5μm、油球がある。

参考文献

今関六也・本郷次雄(1989) 原色日本新菌類図鑑(Ⅱ)、315pp. 保育社、大阪。

京都府自然環境保全課(2015) 京都府レッドデータブック2015。https://www.pref.kyoto.jp/kankyo/rdb/、(2025年9月16日閲覧)

県内での生育地域・生育環境

県東部の海岸クロマツ林のうち、限られた地点においてのみ分布が確認されている。子実体は落葉や腐植が堆積していない砂質土壌に発生する。ショウロよりも発生頻度は低い。

存続を脅かす原因

生息域の狭小化、共生関係にあるクロマツ(林)の衰退、生育土壌の富栄養化。

(執筆者: 富川 康之)

準絶滅危惧 (NT)

イグチ目ショウロ科

ショウロ

Rhizopogon roseolus

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):宮崎恵子



■ 選定理由

国内に広く分布が認められているが、各分布域は狭小である。クロマツと共生するため、県内ではおもに海岸砂丘地に造成された防風クロマツ林に分布する。クロマツ林の減少による分布域の狭小化、さらに本種の生息に不適な林地土壌の富栄養化が進み、県内での絶滅が危惧される。

■ 概要

子実体は地中または半地中に生じ、球形から類球形で、直径1.5—3.5 cm。表面は白色から淡黄褐色を経て、淡紫褐色に変わる。傷付けると淡赤色に変色する。内部は幼菌時に白色で芳香があるが、徐々に黄土色からオリーブ色となり、成熟すると不快臭となる。胞子は長楕円形、平滑、8—10×3.5—4μm、油球があり、非アミロイド。

子実体は特有の芳香が好まれ、優秀な食用きのことしてされている。

● 参考文献

今関六也・本郷次雄(1989)原色日本新菌類図鑑(Ⅱ)、315pp。保育社、大阪。

今関六也・大谷吉雄・本郷次雄(2011)増補改訂新版日本のきのこ、山と溪谷社、東京。

富川康之(2006)子実体懸濁液散布によるクロマツ苗畑でのショウロ栽培、島根県中山間地域研究センター研究報告、2: 43-49。

■ 県内での生育地域・生育環境

まとまった分布域は島根半島西岸の海岸クロマツ林で、このほか矮小な海岸クロマツ林に発生する。クロマツのみが生育するような、乏しい植生が生息適地である。子実体は晩秋と初春、落葉や腐植が堆積していない砂質土壌に発生するが、しばしば未分解の落葉層下面にもみられる。

■ 存続を脅かす原因

生息域の狭小化、共生関係にあるクロマツ(林)の衰退、生育土壌の富栄養化。

(執筆: 富川 康之)

菌類

準絶滅危惧 (NT)

イボタケ目マツバハリタケ科

マツバハリタケ

Phellodon fuligineoalbus

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):宮崎恵子



■ 選定理由

国内に広く分布が認められており、マツ科樹種と共生するため、県内では海岸砂丘地に造成された防風クロマツ林と山地のアカマツ林に分布する。マツ林の減少による分布域の狭小化のため、県内での絶滅が危惧される。

■ 概要

子実体は傘と柄からなる。傘は初め丸山形、のち扁平に開き、中央はややくぼみ、縁は波状となる。直径5—15cm。傘上面はなめし皮質、淡い材木色で、縁は白色。傘下面は針状で、針の長さは5—8mm、初めは白色、徐々に材木色となり、柔らかい。柄は長さ2—3cm、太さ1—1.5mm、傘よりも濃色。胞子は類球形、表面に刺状の突起があり、3.5—5μm、非アミロイド。

子実体はヒノキのような爽やかな香りと、独特の歯ごたえのある食用きのこである。

● 参考文献

今関六也・本郷次雄(1989)原色日本新菌類図鑑(Ⅱ)、315pp。保育社、大阪。

環境省自然環境局生物多様性センター(2025)いきものログ/レッドリスト・レッドデータブック。https://ikilog.biodic.go.jp/Rdb/booklist。(2025年9月16日閲覧)

■ 県内での生育地域・生育環境

県内では東部地域の海岸クロマツ林と、県東部飯南町のアカマツ林で分布が確認されている。子実体は秋季に、落葉や腐植を持ち上げるようにして群生する。

■ 存続を脅かす原因

生育域の狭小化、共生関係にあるアカマツとクロマツ(林)の衰退。

(執筆: 富川 康之)

絶滅 野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

情報不足 (DD)

ベニタケ目ニギョウタケモドキ科

ヌメリアイタケ

Neolbatrellus yasudae

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	情報不足 (DD)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧 (NT)

No Image

選定理由

国内における分布は比較的まれである。県内ではマツが生育する限られた地域においてのみ分布する。マツ林の衰退により、県内での絶滅が危惧される。

概要

子実体は傘と柄からなる。傘は丸山形で、のちに平らに開き、ほぼ円形で、直径2—8cm。傘上面は濃青藍色で、粘性を帯びるが、乾くと光沢をあらわす。肉は白色で、やや苦みがある。傘下面は白色、管孔状で、柄に長く垂生する。柄は白色、中心生から偏心生で、長さ3—6cm、太さ5—12mm。胞子は楕円形、無色、平滑、4.5—5×4μm。

国内では北海道、本州、四国において、マツを交えた雑木林の地上に発生する。

参考文献

今関六也・本郷次雄 (1989) 原色日本新菌類図鑑 (II), 315pp. 保育社, 大阪.

環境省自然環境局生物多様性センター (2025) いきものログ/レッドリスト・レッドデータブック. <https://ikilog.biodic.go.jp/Rdb/booklist>. (2025年9月16日閲覧)

県内での生育地域・生育環境

県東部飯南町のアカマツと広葉樹が混交する林地において、2004年に子実体1個体が確認されたのみである。

存続を脅かす原因

生育域の狭小化、共生関係にあるアカマツ (林) の衰退。

(執筆者: 冨川 康之)

菌類

絶滅
野生絶滅

絶滅危惧 I 類

絶滅危惧 II 類

準絶滅危惧

情報不足

菌類

絕滅
野生絕滅

絕滅危懼 I 類

絕滅危懼 II 類

準絕滅危懼

情報不足